

医療機関の復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応 ～医療機関へのヒアリング結果～

○村久木 洋一（障害者職業総合センター 研究員）

田中 歩・山科 正寿・依田 隆男・宮澤 史穂（障害者職業総合センター）

1 背景・目的

障害者職業総合センターが取り組んでいる「職場復帰支援の実態等に係る調査研究」において、復職支援プログラムを実施している医療機関に対してのアンケート調査を行った（平成30年度）。その結果、複数の医療機関から、「利用者の中に、発達障害特性がある者が一定数含まれている」との回答があった。先行研究からも、復職支援プログラムの利用者における発達障害特性のある者の存在が複数報告されている^{1) 2)}。このような状況下で、復職支援プログラムを実施している医療機関の中には、発達障害特性のある者を対象とした復職支援プログラム（以下「発達対象プログラム」という。）を実施している機関や、発達対象プログラムは無いものの、通常の復職支援プログラムにて発達障害特性のある者への対応を実施している機関が存在する³⁾。発達障害特性がある利用者への復職支援の実践については報告数が限られているため、支援方法についての知見を収集し、整理することが必要と考えられる。

そこで本稿では、発達対象プログラムを行っている医療機関の実施状況や、通常の復職支援プログラムの中で発達障害特性がある者へ対応している医療機関での対応状況について調査した結果について報告する。

2 方法

復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応に関する知見を得るため、医療機関に対するヒアリング調査を実施した。

(1) 調査対象

2018年に開催された第1回日本うつ病リワーク協会年次大会にて、自機関の復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応について報告をしている医療機関より、調査への同意が得られた3か所の医療機関を対象とした。

(2) 調査方法と調査時期

研究員の訪問による半構造化面接とし、2019年10月に実施した。

(3) 調査項目

ア 3機関すべてに聴取した内容

- ・復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応方法（発達対象プログラムの有無）
- ・全利用者における発達障害特性がある利用者の割合

イ 発達対象プログラムを実施している機関に対して聴取した内容

- ・プログラムの対象者
- ・プログラムの目的、特徴
- ・個別プログラムの内容

ウ 通常の復職支援プログラム内にて発達障害特性がある者への対応を実施している機関に対して聴取した内容

- ・発達障害特性がある者への対応方針
- ・発達障害特性がある者への具体的な対応状況

3 結果

3か所の医療機関へのヒアリング結果について以下のようにとまとめた。

(1) 復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応方法（発達対象プログラムの有無）

2つの医療機関（医療機関A、B）においては通常の復職支援プログラムの中に、発達対象プログラムを設けていた。対象者は通常の復職支援プログラムに併せ、発達対象プログラムを受講している。残る1機関（医療機関C）では発達対象プログラムを設けず、通常の復職支援プログラムにて発達障害特性に合わせた対応を行っている。

(2) 全利用者における発達障害特性がある利用者の割合

復職支援プログラムの全利用者における発達障害特性がある利用者の割合は、医療機関Aでは約4割程度、医療機関Bでは約3割程度、医療機関Cでは約4割程度、との回答であった。

(3) 医療機関A、Bにおける発達対象プログラムの概要及び医療機関Cにおける通常の復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応状況

ア 医療機関Aの発達対象プログラムの概要

医療機関Aでは、発達障害特性がみられるとの診断を受けた者に対して発達対象プログラムを実施している。

医療機関Aにおける発達対象プログラムの目的は、職業生活を送る上での「生きづらさ」を和らげるために必要な能力を向上させることである。具体的には、プログラムを通じて①安定した就労を継続する能力、②業務を遂行するために直接的に必要な能力、③職場で周囲の人々に疎まれないようにする能力（具体的には、職場で、他者に違和感を感じさせない、他者から距離を置かれない、他者の怒りを誘発しないように対応する能力。）の向上を図るこ

とを目指している。

上記目的を達成するため、プログラムの全体構成を3つのステップに分けて考えている。第1ステップは「知る」（発達障害について理解する）、第2ステップは「気づく」（自分の特性を知り、職場や日常生活での出来事が自分のどのような特性が影響して起きていたのか、また自分の得手・不得手に気づく）、第3ステップは「考える、訓練する」（自分の得手・不得手を理解した上で、復職後の職場を想定し、起きることが予想される出来事への対応策を検討し、訓練することによってこれらへの対応スキルを身につける）である。この3つのステップを達成するため、文献講読（発達障害に関する論文や文献を講読しグループで感想や気づいた点について話し合う）、グループワーク（発達障害に関連するテーマ等を話し合う）、コミュニケーション（コミュニケーションの事例をもとにグループで話し合い、実際にロールプレイをする）、TDL（Traininat Daily Lifeの略。ADHD傾向がある場合の職場や日常生活の不応について具体的な対処方法を学んで実践する）の4つのサブプログラムを実施している。

イ 医療機関Bの発達対象プログラムの概要

医療機関Bの発達対象プログラムは、発達障害の診断を受けている者、診断は無いが発達障害特性がうかがえる者等が混在して利用している。

医療機関Bの発達対象プログラムは、復職後も健康に生活し続けるためにコミュニケーションの向上を目標として、サイコドラマとSSTを集中して実施するプログラムとなっている。

サイコドラマとは、利用者本人が自発性と創造性を最大限に発揮し、舞台の上でいろいろな感情を体験するプログラムであり、本人の内面や傾向の理解を深め、傷ついたり整理しきれていない気持ちを緩和したり、他者への信頼感や自己肯定感を高めることを目的とする。またSSTは、利用者が日頃悩んでいることや試してみたいことをテーマとして提案し、問題解決に向けて実施している。テーマの設定範囲について特に限定せず、利用者同士の意見交換を重視している。これらを通し、復職後の職場における行動の具体的なノウハウを獲得することを目的としている。

ウ 医療機関Cの復職支援プログラムにおける発達障害特性がある利用者への対応状況

医療機関Cでは、担当医師から「発達障害特性があるため、発達障害特性に着目した支援の効果が見込まれる」との示唆が得られた者を対象に、特性に応じた対応をしている。なお、発達障害特性がある者の把握はあくまでもスタッフがプログラムを円滑に進めるための参考とするものであり、利用者本人に対して発達障害に係る診断を受けるよう勧奨することはしていない。

医療機関Cでは発達対象プログラムを設けず、通常の復職支援プログラムにて発達障害特性がある利用者に対応をしている。

医療機関Cでは発達障害特性がある者の困りごととして、衝動的に行動してしまう、理解のずれがあり周りとの誤解が起りやすい、自分の思考や感情に気づきにくい、「正しさ」へのこだわりがあり多角的に物事を見るのが苦手である等があると捉えている。支援に際しては、まずはスタッフと利用者の中でプログラム利用に当たっての前向きな協力関係の構築が必須であると考えている。また、利用者はそれぞれ困りごとを抱えていることから、スタッフが利用者の現状を「今はこれでよい」と承認することを重要視している。その上で、スモールステップで共に復職に向けた対応を考えていく。

上記の支援の考え方に基ついで行われているプログラムの具体例として、集団認知行動療法及びSSTを紹介する。集団認知行動療法及びSSTでは、コミュニケーションの仕方を具体的に学び、「できること」を増やすことを目的としている。同病院では発達障害特性がある利用者に対するアプローチとして「自己理解、特性理解を深める」ということを重視しており、認知行動療法における「考え方の癖」をキーとして自己理解を深める支援を行っている。なお、プログラムが進む中で徐々に他の利用者を観察したり、自分の考え方について他者からの評価を聞いたりすることで、他者の中に自分にもあてはまる点を見つけ、様々な価値観や考え方に目を向けることが可能になる利用者も存在する。

4 まとめ

今回の調査で、復職支援プログラムにおける発達障害特性がある利用者への対応については医療機関ごとに特色があるものの、コミュニケーション力の向上、自己理解の促進、他者への信頼感の向上等を重視していることがうかがえた。これらは一見すると通常の復職支援プログラムにも共通する支援テーマであると考えられるが、発達障害特有の認知や行動の特性に合わせたきめ細かなアプローチを行っている点が特徴と言える。復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応については、引き続き知見を収集し、整理することが必要と考えられる。

【参考文献】

- 1) 秋山剛ほか：自閉スペクトラム特性を有する患者へのリワーク支援の手引きの作成と有用性調査「精神神経学雑誌120(6)」p. 469-487, 2018
- 2) 海老澤尚：成人の発達障害専門外来とリワークプログラムの紹介「精神神経学雑誌117(3)」p. 205-211, 2015
- 3) 第1回日本うつ病リワーク協会年次大会 福島大会 プログラム・抄録集, 2018